

エミリ・ツム・ブルン／アラン・ド・リベラ著
 大森正樹訳『マイスター・エックハルト
 ——御言の形而上学と否定神学——』

昭和60年，国文社，326頁.

宮本久雄

エックハルト(以下Eと記す)は巨大な謎である。Eをめぐる立てられた諸学説^{ドクトリナ}や飛び交った様々な^{レブチル}称号はりがEを顕わしたすよりも、むしろ隠すかにみえるのはそのためであろう。Eは世界と自己の根源を単純なひたむきさで追求した魂であった。本書はEのこの単純な魂とそれが追求した根源を全体として受取って、その謎に挑んでゆこうとする姿勢に貫ぬかれている。碩学シュニユー神父が「まえがき」で指摘するように、Eの魂がもつ謎にみちた全体とは「厳密な形而上学と燃えさかる神秘思想の一致」の体現に外ならない。従ってこの全体Eに肉迫しようとする著者達の学的方法は「Eの領域が端から端まで取り上げられる」仕方では彼の言葉を分析、対比、総合する手続きを経る。だからその研究の特徴はドイツ語説教に限られず、所謂Eの自然学、形而上学の内容にまで触手を伸ばしていることにある。さらに研究はEの思索の前提（アウグスティヌス、擬ディオニシオス、アルベルトゥスの伝統を汲むケルン学派、ラインーフラマン神秘主義、教父など）の綿密な歴史的研究をもふまえてなされている。しかもこの学的姿勢は澄んだ瞑想に裏打ちされていることが忘れ去られてはならないであろう。

ところでEの謎を弥増す問いが久しくE研究者を悩まし続けてきた。それは周知の如く、存在・無・知性などの言葉の意味確定とそれらが指し示す諸現実の優劣の問題である。それはとりわけ『前期パリ問題集』が含む（とみえる）矛盾の問題でもある。すなわちそこでは「神は存在である」というアウグスティヌス、トマスの

存在論が大きく逆転されて、「神は存在ではない」という命題が浮上し、むしろ「神は知性認識である」と規定されてくるのである。その結果、存在は被造物に帰属する第一のものとされる。他面Eは後期『三部作への全般的序文』において再び存在の優位を説くかと思えつつ、同時にドイツ語説教において超越性、無、自由の立場を強調するように揺れ動いている。研究史を辿ってみてもこの謎は歴史的前後関係におけるE説の変化とか、あるいは存在と無の弁証法などの解釈によっては容易に解けそうもない。

第2章担当のド・リベラはこの問題解決に向かって次のように口火を切る。彼によれば二つの形而上学がある。1つは『出エジプト記』の形而上学である。それは『出エジプト記』(3, 14)の神名「エフェー・アシェル・エフェー」解釈において神を徹底的に存在とみる(nihil negat)。従って被造物は無とされ、神・存在と被造物・無との隔絶が強調される。この無限と有限の隔絶を関係において思索しようとアナロギア論(Eの場合、帰属のアナロギア)が用いられるが、遂にこの隔絶は総合されない。絶対無は絶対的存在の下に包摂されない。その結果人間は存在たる神へ「還帰する前の人間」として「存在への帰郷」すなわち至福の生を実現できずに見棄てられたままになっている。この形而上学に対し今や「御言の形而上学」が出現する。それは『ヨハネ福音書』(1, 14)から直観を得、神の御子が被造物を攝取不捨にする事態つまり存在と無の間にある隔絶の乗りこえを示す。かくして「御言のうちに還帰する被造物は神の存在そのものに関わる」ことになる。これは言いかえると人間の魂が創造以前の「根」^{フリンキビウム}源に還帰することである。その根源において父は被造物を生み、被造物は御子となり、父と一致する。従って「御言の形而上学」は存在の形而上学として創造の意義と至福の生を人間に示して「アナロギアの形而上学」を乗りこえるのである。

ところでEの存在論の特異な点はこの御言の形而上学における「存在」を「知性認識」と捉えることにある。実際Eは『パリ討論集』の第二問において御言を知性に関係づけ、神を知性認識としている。とすれば御言の形而上学は本来的に自己をさらにこえ、存在を超越してゆくような契機を自己に秘めていることになる。ここにおいてEの説く「存在」は魂がそこに安住することを許さない根底、一、神性などの無相としてあらわれてくる。それは一体どのような事態であろうか。

ド・リベラを承けたツム・ブルン（1章と3章を担当）は、知性の存在に対する優位が単にフランシスコ会神学の意志優位説への反動として形成されたという見解に満足しない。彼女はそこで言が成立する知性の機能に注目する。すなわちE存在論の理解のためには「表象及び知性と関係する一切を〈非有〉と定義することで成立する〈知的=ヒリズム〉の見地」に立たねばならないという。知的=ヒリズムによれば、表象・^{スベキネス}可知的形象は非存在なので、存在に対して透明となり、その結果存在をわれわれの認識に現前せしめる。そればかりか、この表象による抽象の徹底によって合成的具体的存在の彼方の根源的實在にまで達する。それはあたかも知性が火と熱とを分離し、具体火を越えて火の本質を把握する如くである。このようにして知性が神も能わぬ剝離の、赤裸とする能力であることが示される。この知性は存在を純粋な相の下において捉える。だから神的存在と被造的存在との一義的關係は全く否定されてくる。神である混合なき単純な存在はもはや区別を含む三位一体のペルソナの神でも、あるいは被造的存在と関わる創造主でもないであろう。つまり有相でみられる神ではない。ツム・ブルンの補遺によれば、Eが生涯をかけて追求した余りに単純な根源とは、命題「存在は神である」において顕わとなる存在である。それは伝統的定式「神は存在である」における有相の神さえ述語となるような、非限定的な、その意味で一なのである。ここに知性の剝離機能は「卓越した一としての神性」を暴き出す。だから今や存在を基礎づけるものは知性なのである。このような無相の存在把握は、トマスの存在把握（ここでは知性や意欲もこの存在の完全性とみなされる）とニュアンスを異ならせている。そこにツム・ブルンが、Eの存在観を一方のアウグスティヌス的意味と、他方の擬ディオニュシウスの卓越、否定の一との総合、止揚と考えるわけがある。

ところで著者達によれば以上のようなEの存在把握の独自性は、魂の実践的生の深化と一体をなして形成されているところにあるという。だから一寸間違ふと知性による神的一性への突破は現実的世界からの逃避をうみだす偽神秘主義の主張に外ならないということにもなる。事実ロイスブルクはE神学を「誤った閑暇」を主張する「^{キエテイスム}静寂主義」として批判した。ところがEは「根底に引き下れ、そしてそこで行為せよ」と語る。そしてEは彼の非静寂主義的な神秘道の基礎づけを、アリストテレス、トマスの思索に仰いでいる。それによれば人間の経験的認識は能動知性

によって抽象された可知的表象が受動知性に受容されるところに成立する。ところでこの能動知性の代りに神的知性が人間の認識に場所を占める場合を想定してみよう。そのとき人間知性の受動性は神的能動性と合一して一となり、自己の能動的経験によって知るのではなく、神的知性によって万象を垣間見るのである。これこそ自己の知性を無化し、一切の像から離脱して神の像によって超像化 (überbildet) された「離脱した人」の至福であり、彼の魂における神の子の誕生に外ならない。これはまた被造物としての被造物の存在 (多) を捨離して、創造以前の一なる故郷に還帰することでもある。魂のこの観想において働くものは神である。だから知性による離脱は神が地上で働くための必要条件なのである。ソム・ブルンによればEは「他者に観想したことを伝える」というドミニコ会士の生きざまに忠実であったことになる。実際、他者のうちに全面的に現存することは、最も絶対的な捨離次第である。

ド・リベラは魂の知的回心によるこの神の子の誕生を当時の自然学という実体的変化に類比的に基づかせている。すなわち自然法則において運動変質が形相への準備態勢であり、この準備完了の一瞬に事物は単一の実体的形相を受容し、実体的に生成する。そのように徳に先行する諸実践が徳を生じさせ、そのようにまた離脱のプロセスにある魂が瞬間的に神の存在のうちに出生する。このように「自然的な事柄」と「道徳的な事柄」と「神における子の誕生」との構造およびダイナミズムの連続性が明らかにされる。それは理性と啓示のつながりを暴き深めてゆくことであり、そこに生と思索の師Eの面目が躍如としている。以上の如く著者達はEにあって知性こそが彼の存在観と生の結び目であることを証明しているように思われる。言いかえればEの思索は魂の無知を徹底して恐ろしく単純な根源的に還帰したのである。

このEの全体像は今日の科学と神秘の分裂の時代にあって思索が目指さなければならぬ方向の道標なのではあるまいか。それは学知と神秘の一致を指し続ける道標であろう。それは例えばトマス存在論の研究に対しても『神学大全』一巻のみに集中するのではなく三巻までもまきこんでゆくような方向を指し示していると思われる。それはまた今日のわれわれの思索が「討論」だけでなく「講解」や「説教」にまでいたる多様な言語位相に生きることを求めているよう。

末筆ながら本訳書に関して一言すれば、何人も先ず工夫の凝らされた日本語の出来栄に一驚せずにはいられまい。ただ *passior, pâtre*. は場合によっては「蒙^{ハクイン}むる」くらいの広い意味にとった方がよいと思われる (162—172頁)。いずれにせよ「あとがき」は最良の書評であり、全体として本訳書は、中世研究の枠を突破した、ものを考える上での絶好の原作品をもの見事に日本語に刻みとり、われわれの許に贈り届けている。

なお、本訳書（つまり、本書の日本語版）は著者の意向にもとづき、そのフランス語原稿によってなされたものであり、本書のフランス語版, *Émilie Zum Brunn et Alain de Libera, Maître Eckhart, Métaphysique du Verbe et théologie négative*, Bibliothèque des Archives de Philosophie, Nouvelle Série 42, Beauchesne, Paris, 1984, pp. 249. と並行出版の形式をとっていることを付記しておく。

Alois M. Haas, Heinrich Stirnimann (Hrsg.):
*Das <einig Ein>. Studien zu Theorie und Sprache
der deutschen Mystik.*

Freiburg (Schweiz), Universitätsverlag, 1980, 454 S.

小田川方子

この書『<唯一なる一>。ドイツ神秘主義の理論と言語についての研究』は、最近西欧で再び注目を集めているドイツ神秘主義に関する神学者、哲学者、独文学者、言語学者たちによる学際的な研究である。これはスイスのフライブルク大学の教会合同研究所での「宗教経験の独創性」についての研究セミナーでの諸研究から発展し、本としてまとめられたものである。

両編者による序文で、まず、このセミナーで参加者たちの関心が自発的にドイ